

劇団員に聴く



主演 ^{よしのり} 芳徳役
福祉施設勤務
みずたにあさみ
水谷 麻美さん

機会があればまたチャレンジしたい

多くの人が見に来てくれて感謝の気持ちでいっぱいです。本番も楽しんで演じることができました。そして、長丁場の練習を理解し、協力してくれた職場や家族にも感謝。「また見たい」と言ってくれる人もいたので、機会があれば、またチャレンジしたいです。



語り部常一役・美術担当
デザイン工房「図画工作」
やまなか えつろう
山中 悦郎さん

公演を「宝さがし」のヒントに

常一のセリフにもありますが、この公演が、地域の宝さがしのヒントになればいいですね。郷土を見直すことは、子どもが故郷に誇りを持つことにもつながるはず。そして、自分のデザイナーとしての技術が、地域のために役に立てたということもうれしいですね。



次郎兵衛・村人役
郵便局勤務
やまなか あつこ
山中 厚子さん

練習も本番も最高に楽しかった

今でも、お客さんから「よかったよ〜」、「また見たい」と言われます。仕事や家事もあるので練習は大変でしたが、笑いが絶えず充実した日々が過ごせました。本番では笑っている友人や知人が見えて、自然とアドリブが。楽しみながら演じることができました。



塩の道 Salt Road が伝えるもの

演者も観客もほとんどが顔見知り。そんな舞台公演が、須木地区で開催されました。物語のモチーフとなったのは、交易路として先人の生活を支えた七熊山にある「塩の道」。会場が一体となり、笑い涙で包まれた1回限りの特別な舞台から、地域おこしのヒントを探ります。

半年間の練習重ね、魅せた迫真の名演技

須木小の教諭やPTAらでつくる、すき歌劇団「なでしこ組」の初公演は2月7日、須木総合ふるさとセンターで開かれました。キャスト、スタッフ14人が完全オリジナルの喜劇「塩の道〜ソルトロード〜」を上演。会場を埋めた観客を爆笑の渦に巻き込み、拍手喝采を浴びました。

物語は昔、須木の人たちが物流の交通路として利用していた「塩の道」をモチーフとした時代劇。酒井隆座長（須木小・教頭）が原作と脚本を、デザイナーの山中悦郎団長が美術を、

すき歌劇団「なでしこ組」紹介（敬称略）＝山中悦郎、水谷麻美、平野里美、山中厚子、片地亜理沙、黒木鏡子（元須木小）、上村奈緒美（元須木小）、立野純平（須木小）、福島龍太郎（須木小）、毛利和哉（須木小）、勝吉千穂（須木小）、酒井隆（須木小）、勝本哲也（地域おこし協力隊）

ピアノ講師片地亜理沙さんが劇中歌の作曲を担当。1時間20分の超大作で、厳しい生活の中で、たくましく生きる人々をユーモアたっぷりに描きました。「なでしこ組」は、酒井座長が呼びかけ、昨年9月に発足。毎週1、2回の練習を重ねてきました。「メンバーを考へても、最初で最後、1回限りの公演」と話す酒井座長。演じた人、見た人に感動を与えた「塩の道」は、今後どこに向かっていくのでしょうか。





塩の道伝承を語り継ぐ
やすたけ しげみ
安竹 茂見 さん

若い世代を中心に郷土の歴史を継承してほしい

酒井教頭と飲みの席で一緒になったときに、演劇の話題になりました。酒井教頭がその時に描いていた構想は、別のもので、「もっとおもしろい伝承があるよ」と「塩の道」について語りました。山で暮らす須木の人々にとって、塩は生きるために必要なもの。須木では、古墳も見つかっているので、その頃から須木の人々は、山の幸と生活に欠かせない塩などを交換していたのかもしれま

せん。塩の道について記された文献は少なく、詳しいことは分かりません。ほとんど口伝で語り継がれてきたものと思われます。今回の「塩の道」公演で、ふるさとの歴史や先人の生活の一端を覗くことができ、初めて知った人もいるということで、意義深いものがあります。この公演をきっかけにして、若い人たちが中心となって、郷土の歴史を残して欲しいと思います。

語り部に聴く

仕掛け人に聴く

これからのすき歌劇団の活躍に大いに期待

もともと大の演劇好きで、これまでも赴任先の学校や地域で、オリジナルの演劇を行ってきました。テーマを探していたときに、耳にしたのが「塩の道」。しかし、なかなか文献に残っていないので苦労しました。本を取り寄せ、当時の情報をかき集めました。史実とは異なる部分があるかもしれませんが、「塩の道」をモチーフにフィクションという形で脚本が完成。小林高校で演劇部

だったというPTAの水谷さんと片地さんに声をかけ、須木歌劇団が活動しました。須木小に勤務していた若手教諭らも入団し、遠くから毎週1回の練習に、駆けつけてくれました。練習はいつも笑いが絶えず、脚本や演出が変わることもしばしば。それぞれが得意分野を発揮する楽しい現場でした。「なでしこ組」のゆかいな仲間たちとともに、今後の歌劇団の活躍を期待しています。



座長・脚本・馬2役
須木小学校
さかい たかし
酒井 隆 教頭



ルポ執筆者

すき歌劇団・照明担当
地域おこし協力隊
かつもと てつや
勝本 哲也 さん

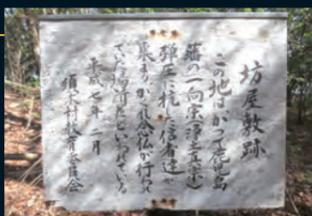
初めての試みは不安。皆で分かち合い実行へ

公演は、役者と観客がお互いを巻き込みながら一体化していき、アドリブを連発。観客が役者を隣人として知っているからこそ生まれる親密な場でした。何日経っても「ソルトロード良かった〜」という声を耳にします。初めての試みはいつも不安に満ちています。今回の公演の結実のように、少しの勇気を、挑戦を、冒険を、皆で分かち合しましょう。

塩の道が伝えるもの Salt Road



「楽しむこと」が地域おこしの推進力に
今回の「塩の道」公演から、地域おこしは「楽しんでやる」ことが、とても大切なことだとわかります。同じ目標に向かい、充実した日々を過ごした団員たち。笑いに笑った観客たち。公演後は、涙を流し抱き合う多くの人の姿がありました。関わる人が「楽しむ」ことで、地域おこしの推進力は大きくなります。地域資源を発掘し、将来像を探っていく方法は、劇でも歌でも何でもいいのです。まずは得意なことや、ワクワクすることから。地域おこしにつながる、楽しい「宝さがし」始めませんか。



暗い夜に、弾圧された信者たちが念仏を唱えるには絶好の場所であると思いつきながら、こんな所まで来なければならなかった大変さが偲ばれた。「坊屋敷」には昔、絶世の美女が住んでおり、その死を悼んだお坊さんが植えた柿木がある」との言い伝えがあり、実際に枯れているものの一本の柿木が残っていた。そして帰途についた。

郷土史を堪能できるも整備と伝承が課題

今回歩いたのは、七熊山登山口から坊屋敷跡までの標高差約200m、約7キロのコース。往路はゆっくり散策しながら約1時間半、復路はおよそ1時間の道のりだった。道にはリボンマーカーが巻かれているが、本数が少ないため、整備が必要だろう。郷土の歴史を満喫できるすばらしい資源。伝承を急ぐ必要を感じた（記録より抜粋）。

「塩の道」公演に携わり、実際の「塩の道」に地域資源としての魅力を感じ、1週間後に、「塩の道」の実地調査を行った。須木の大规模林道の途中にある七熊山登山口を少し登ったところから、唐突に「塩の道」は始まる。道の途中には、尾根伝いの幅50位の所も。こんな狭いところを、馬が背に荷を乗せて歩いていったことに驚いた。

かつて、蔵入り米（年貢米）を運ぶ際、急峻な道を登るのに積荷を小分けした「俵置き場」がある。しばらく七熊山山頂に着いた。山頂から尾根伝いに歩くと、霧島が木々の間から垣間見える「花掛け杉跡」を通り、斜面を下ると、人馬の貴重な水源であった「湧き水」の跡が残っていた。そこからしばらく歩くと、「坊屋敷跡」。現在は立ち木があり展望は望めないが、看板が設置されている。

地域資源の活用探る 協力隊員が見る塩の道



公演の明日を探る
塩の道を歩く
ルポ体験

「この劇を通して、昔の人々の知恵と勇気を想像していただき、これからの地域づくりに、そしてまだまだ眠っておる宝探しのヒントとなれば幸いです」

塩売りの語り部 常一の前口上より

